

2024年11月1日 【清真学園 校長室だより】 「教育」と「発育」

清真の10月は、オープンスクールが目白押しです。先月も第2、3、4土曜日に計3回、開催しました。昨年から本校の中学前期入試が12月上旬に前倒しされたため、特に小学6年生にとってはすでに入試まで二ヶ月を切ったタイミングでしたが、数多くのご参加をいただきました。ありがとうございました。

オープンスクールは、各学校の教育に対する考え方や指導方針等をお示ししたり、教育環境を実際にご覧頂くことで、進路選択の参考とするために開催をします。しかしながら、限られた時間の中で本当に意義ある学校公開をすることは決して簡単ではありません。そのために、私自身は、校長としての立場で清真の教育を保護者の方々に分かりやすくお伝えするために、最近よく、次のようなお話しをさせていただいています。

慶應義塾を創設した福澤諭吉の数多い著作の中に「文明教育論」という学校教育について述べたものがあります。そこで記されている、大きく二つの事柄が、私がこれまで様々な学校現場で長く感じてきたことに、端的に言及していると感じています。

まずひとつは、「限られた時間の中で教えられることには圧倒的に限界が在り、無理に教え込もうとすることは、子ども一人ひとりの潜在能力を伸ばすことにむしろ悪影響を及ぼし、やる気を削ぐことになる。厳につつまなければならぬ。」

もう一つは、「educationを『教育』と訳してはならない。『発育』と訳すべきである。educationの語源であるeducereの元来の意味は（隠れた才能・能力などを）引き出す。つまり学校が有する第一義的な使命は、教えることではなく、生徒一人ひとりが生来有している、能力や才能をうまく引き出すことにある。」

諭吉の言を待つまでもなく、学校には興味関心や適性の異なる数多くの生徒たちがいます。そして彼らを実際に「発育」しようとするれば、何より、取組を通じて成長が期待できる様々な機会を提供することが不可欠です。以前もお伝えしました(校長室だより 8月号)が、ゼミ活動や生徒主体の学校行事、海外研修、さらには大学などの高等教育機関での研修や様々なコンクールへの参加、多様な講師による各種講演会なども、すべてはそのためのしかけであり、それは清真の教育の根幹を支える必要欠くべからざる要素であることに、疑いの余地はありません。